

美を科学する — 感性認知学の視座 —

浮世絵の美人画では、いわゆる斜視や引目など、視線方向を曖昧にした表現によって、人物の魅力が引き出されている。浮世絵ではまた、登場人物の視線がしばしば同じ方向に向けられ、心の通い合う構図として受けとめられている。小津安二郎の映画でも見慣れたこうした視線の構図は、西洋の絵画ではきわめて稀で、二人の女性が並ぶカルパッチョの「コルティジャーネ」では、登場人物に対し、散々の指摘が行われてきた。視線のあり方は文化にも関係するようである。

視線は見る者の注意を反射的に引き、視力を越える精度で高速にその方向が読み取られ、対象との関係性が解釈され、感情が誘発される特徴をもつ。浮世絵を用いて、さまざまな視線方向の画像を作成し、人物の印象を評価させた実験でも、驚くほど鋭敏な感性判断が無自覚的に行われることが分かった。曖昧な情報に基づき、瞬時に鋭い判断が下される点は感性判断と共通する。

見ることと感じることは分けがたい形で、ひとつの意識として現れてくる。知覚と感性は、共通する性質をもちながら、それぞれ独自の特徴をもつ。感性認知学は心の働きとしての感性を実証的に考える学問である。知覚・認知特性を基盤に感性について考える学問でもあり、感じることを通して知覚や認知について考える学問でもある。生理学的基盤（Vision）から社会文化的要因（Visuality）までを視野に入れて、多層的な観点から心の理解をめざす感性認知学を、美に関わる例も引きながら紹介する。

2010年 **12月3日** (金) 18:15~19:45

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

参加費：無料（学生の来場歓迎）

会場準備の都合上、塾外の方は事前申し込みをお願いいたします



講師：三浦 佳世 氏

◇九州大学大学院 人間環境学研究院 教授

大阪大学文学研究科博士課程修了（学術博士）。専門は感性認知学・知覚心理学であり、研究内容は知覚・認知的特性を基盤に、感性あるいは感性表現に関し、実験心理学の立場から考察すること。主な著書は、単著「知覚と感性の心理学」（岩波書店）、編著「知覚と感性」（北大路書房）、共著「感性の科学」（朝倉書店）、「共視論—母子像の心理学」（講談社）など。

 **REC for NS**
research and education center for natural sciences